
エンドレストラジティ ~ 終わり無き悲劇のカケラ ~

真理の魔女

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エンドレストラジティ〜終わり無き悲劇のカケラ〜

【Nコード】

N6747S

【作者名】

真理の魔女

【あらすじ】

永遠の6月をループし続ける少女・古手梨花

しかし、ある日未来の6月をループし続ける事になった

それは1人の『女子高生』の力のせいだった

その未来でも悲劇が始まる

梨花は元の世界に戻るのだろうか

序章

ああ…いつまで続くのだろうか

このくだらない永遠の6月のループ…

私はただ幸せに生きたい…

ただそれだけなのに…

そう…ただ幸せに

…せん」

誰かの声が聞こえる…

『ただの人間に興味ありません!!』

ただの人間に興味がない…

いつまで聞こえるのだろうか…

『この中に宇宙人、未来人、超能力者、異世界人がいるなら私のと

ころに来なさい!!』

くだらない…

と思ったその時…

バキッ！バキバキッ！！

足元が崩れ私は落ちた6月上旬ー

北高校内ー

『キヨン!!ドコ行くのよ!!』

と叫ぶ女子高生

彼女の名は涼宮ハルヒ

お察しのとおり一般人全く興味のない奴だ

『悪いな、ハルヒ。今日から親戚の女の子が家に来るから待ち合わせで今から公園行かなきゃなんないんだよ。だから今日は帰らせてもらっぜ。』

と下校をしようとする男子高校生は俺キヨンである

いたって普通の人間だ

『キヨン君。また明日です』

『……………』

黙って読書をしているのは長門由希

そしてメイド姿の可愛い人は朝比奈さんこと朝比奈みくる

『では、また明日』

そして妙にウザイくらい爽やかなのは古泉一樹だ

『ああ、またな。』

梨花との出会い

ハルヒ達と別れを告げ

俺はその親戚と会うため公園に向かっていた

親戚が来るなんて両親から初めて聞いた

しかも初対面

どんな奴なんだろうな

なるべく同じ年か妹くらいの年の子であってほしい

俺はそう願ってるうちに公園に到着した

すると青髪のロングボブヘアの小さな女の子を見つけた

『あのーお嬢ちゃん。俺キョンって言うんだけど君が今日からウチにお世話になる子かな?』

『あ、こんにちはなのです。僕古手梨花というのです よろしくなのです にはー』

か、可愛い!!!

帰り道の話

俺は梨花ちゃんと2人で家に帰る最中だった

『梨花ちゃん。うちは普段から両親が夜遅くまで仕事で出かけてるから困ったことがあつたら俺が妹に聞いてくれよな。』

『はいなのです みいー』

とまあ仲良く話してた次の瞬間

梨花ちゃんは妙な事を言った

『キヨン。』

『何だい梨花ちゃん？』

『この街で何か可笑しなことは起きてないのですか？』

『可笑しなこと？特にないぜ』

『そうなのですか。なら良いのです』

まるで梨花ちゃんは何かを知っているようだったように俺はみえた

変死体の噂（前書き）

四話あの病気が登場です

これは悲劇の始まりに過ぎない

変死体の噂

家に帰って梨花ちゃんと妹と楽しい時を過ごした俺は2人を寝かすつけ風呂に入ろうとした時だった

電話？誰からだこんな夜中に…

『もしもし』

「夜分遅くにすみません。」

古泉だった

『用なら手短に頼むな。妹といとこが寝てるんだ。』

「はい。では手短に言いますね。実はこの辺りで変死体が続出してるらしいんですよ。」

『変死体？』

「はい、その変死体には共通点があるんです」

『共通点？』

俺は嫌な予感がした…

『必ず喉を掻き毟って出てくるんですよ。』

「な………!?!」

『掻き毟った場所には大量の汚物や血が散乱してるんですよ。』

『それってハルヒが関係あるのか？』

そうだったら何考えてんだアイツは!!

「それは考えにくいですね。まあ我々の機関で調べますから安心して下さい。ではまた明日。」

『ああ、明日な。』

厄介なことになったな

変死体の噂（後書き）

四話終わりました

はじめまして

著者の真理です。

これからよろしく願います。

そしてこれから応援よろしく願います。

梨花ちゃん御披露目(前書き)

谷口初登場ですww

梨花ちゃん御披露目

翌日の昼休み

俺は失態を犯した

なぜなら弁当を忘れたからだ

そんな時…

『おーいキヨン！』

と谷口が俺を呼んだ

『なんだ谷口。』

『お前にお客さんだよ。チヨー可愛い子だぜ』

『みー キヨン お弁当持ってきたのですよ』

『り、梨花ちゃん！？』

何故此処に！？

『キヨン、その子知り合いなの？』

とハルヒが首を突っ込んできた

『僕は古手梨花なのです キヨンの親戚なのですよ。にばー』

『ま、まあそうなんだよ。ありがとな梨花ちゃん。』

『みー どう致しましてなのです』

『梨花ちゃんって言うのか…可愛いすぎるぜ！』

谷口うぜーww

『梨花ちゃん1人で此処まで来てお弁当持ってきてくれるのは有り難いんだけどよ、最近この辺り連続殺人事件あるから気をつけてくれよ。』

『はいなのです では僕はお家に帰るのです』

『ああ気をつけて帰れよ。』

『バイバイなのですー』

と梨花ちゃんは去っていった

梨花ちゃん御披露目（後書き）

谷口ウザさ全開でしたww

梨花の帰り道（前書き）

今回は梨花ちゃんしかでませんww
主に黒梨花ww

梨花の帰り道

ああ…何で私はこんな世界にいるんだろう

あの声を聞いてから

もう何回ループし続けてるのだろう

ただこれだけは解る…

私は多分「未来」にいる

此処にはあの場所にはないモノが沢山ある

圭一も沙都子もみんないない…

私にこの世界で何をしろと言うのか…

『あら、見ない子ね。』

と1人の中年の女性が私に声をかける

『みー こんにちはなのです 僕は古手梨花なのです よろしくなのです にはー』

『あら可愛い。梨花ちゃんって言うのね。 1人みただけど大丈夫？』

『大丈夫なのですよ お家はすぐそこなのですよ』

『そう、ならいいけど。この所物騒だからね。』

『みー？何がですか？』

『あら？知らないの？殺人事件よ。殺された人はみんな喉を掻き筆つたように殺されてるのよ。後はお腹を裂かれて腸とか…ああ嫌だわ。』

喉を…掻き筆る？

腹を…裂く？

『みー。怖いのです。』

ああまたか…

あれは雛見沢でしかないはずなのに

『でしょ。だから梨花ちゃんも気をつけて帰ってね。』

いつもこの未来の世界をループし続けて思う

何故この世界に……

梨花の帰り道（後書き）

今回は、ほぼ黒梨花でしたWW
次回から悲劇連発します

ハルヒの凶変(前書き)

今回はちよいとSOS団の鬼隠し版です

ハルヒの凶変

その日の部活

妙に部室の机にてんこ盛りのシュークリームが皿いっぱいに乗ってた

『今日の部活は団員全員でロシアンシュークリーム大会をするわよ

！！！』

ロシアンシュークリーム！？

『ロシアンルーレットのシュークリーム版ってわけか？』

嫌な予感がする

『そうよ！！それとこのシュークリーム中には普通の中にな変わった物が入ってるから』

絶対タバスコとか激辛系だろ

『中の物はみくるちゃんに入れてもらったから』

朝比奈さんに濡れ衣を着せるな！！

『じゃロシアンシュークリーム早食い大会開始！！』

早食い大会になってるし！！

とまあ俺達はシュークリームを黙々と食べ始めた

――数分後――

『ぎ、ギブ……。』

俺は燃え尽きた

『こらキョン！！しっかりしなさい！！』

長門…後は任せた

と思った時

『うえ！！げほっごほっ！！』

ハルヒがいきなりむせた

『どしたハルヒ？』

『大丈夫ですか？涼宮さん。』

と古泉がハルヒのそばへ寄り添う

『みくるちゃん！！あんた何入れてんのよ！！』

『

『え？何って何も危ない物を入れてないんですけど。』

『危ない物を入れてない？ふざけないでよ！！このシュークリームの中に裁縫針が入ってたのよ！！嘘付かないで！！それとも何？私に怨みがあるの？』

朝比奈さんが裁縫針！？

『落ちてけハルヒ！朝比奈さんがそんなことするわけないだろ！』

『あんたは黙っててよキョン！！今日はもう帰るわ！！片付けはみくるちゃん罰としてあなた1人がやりなさい！！みんな手伝っちゃ絶対ダメよ！！これは団長命令！！絶対よ！！』

『そんな……』

『んなのあんまりだろハルヒ！！』

『そうですよ涼宮さん！！』

『……』

『な、何よみんなしてみくるちゃんの味方して……もういいわよ！！こんな部活！！』バタンツ！！

ハルヒは出て行った

一体何が起きてんだ……

ハルヒの凶変（後書き）

ハルヒ大暴走でした

いやー書いてる自分も怖かったです

みくるの異変（前書き）

悲劇は水の波紋のように広がり始めます

みくるの異変

その後

長門と古泉も去り

俺と朝比奈さんの2人きりになった

『くそっ！！ハルヒ野郎！！』

『キヨン君…私の事は良いからもう帰って下さい。』

『いやそんなこと…』

『帰って下さい！！キヨン君が帰らないで私の事手伝って涼宮さんが暴走したらどうするんですか！！』

朝比奈さん初めて俺に怒鳴った

『朝比奈さん落ち着いて…』

『落ち着いてますよ！！だからさっさと帰って下さい！！目障りなんです！！』

朝比奈さんまで今日はどうしちゃったんだよ！！

『……分かりました。また明日。』

『……………』

俺はそのまま部室を立ち去り下校した

くそっ！！なんで今日は…梨花ちゃんが来るまでは！！

別に梨花ちゃんが悪いわけじゃないのに！！

すると道端に何か白い物がウネウネ動いてた

なんだ？虫？ウジ虫？

何でこんな所にウジ虫が…

それに血なまぐさい

すると正体は裏路地に首もとから血を出し腹から腸や内臓が飛び出て死んでいる人を見つけた

『う…うわああああああ！！』

叫ばすにはいられなかった

みくるの異変（後書き）

最後はキヨンの悲鳴でオワター

楽しい一時(前書き)

序盤キヨン落ち込んでます

楽しい一時

家に帰った俺は廃人のように
ベッドに横たわっていた

『キヨン大丈夫なのですか？』

『……………』

『キヨン君大丈夫？』

『……………』

妹や梨花ちゃんが心配してくれても俺は返事をする気力もなかった
そりゃそうだあんな死体みてすぐだしな

しばらくするとまた誰か俺の部屋に入ってきた

『キヨン、あんた大丈夫なの？明日学校行ける？』

この日は珍しく母が早く帰ってきた

『行く気ねえよ……………』

『そうよね。じゃあ明日は気晴らしに梨花ちゃんと一緒に遊んだり
してあげてね。』

『ああ……………』

そうだな…梨花ちゃんと一緒にいれば気が晴れるかもしれない

翌日――

俺は梨花ちゃんと一緒に家で1日を過ごしている

『梨花ちゃん何処に行きたいところあるなら連れてくぜ。』

『みーキヨン無理しないで欲しいですの。』

『無理なんかしてないよ。』

『なら僕あの公園に行きたいのです』

『そうか、じゃ行くか』

『はいなのです にばー』

俺は梨花ちゃんと最初に会ったあの公園に行った

『梨花ちゃんは何処に住んでるんだ？』

『僕は雛見沢という小さな村に住んでいるのです。』

『へえー雛見沢か。毎日お雛様が飾ってあるような名前だな。お父さんとお母さんは優しいか?』

『…もう居ないのです』

『え?』

『お母さんとお父さんは死んだのです。綿流しの夜に…』

『綿流しの夜?』

『あの夜お父さんは奇病で死にお母さんは後を追うように沼に身を投げ出して死んだのです。』

『そうか、ごめんな嫌な事思い出させて。』

『でも今は幸せなのです キョンや妹ちゃんがいるから幸せなので す みー』

『そうか。なら良かった。』

こうして俺と梨花ちゃんは公園楽しく過ごした

楽しい一時（後書き）

想像でキヨンの母を入れました

アンドほのほの梨花ちゃんと楽しい一時でした

長門の視線と梨花の言葉（前書き）

黒梨花発動 W W

長門の視線と梨花の言葉

梨花ちゃんと楽しい一時を過ごした
帰り道…そこにアイツが長門がいた

『……………』

『よー長門。今日はおめんな学校行けなくて。ハルヒにメールでも
良いからそう言っといてくれよ。』

『分かった…それと…』

『?』

長門は梨花ちゃんをマジマジと見ていた

『みー?』

『ああこの子な。一昨日から夏の間居候してる従姉妹の梨花ちゃん
だ。』

『はじめましてなのです 古手梨花なのです よろしくです には

ー』

『よろしく…』

『明日は学校行けると思うから、じゃな。』

俺は長門に別れを告げた

だが俺は梨花ちゃんが小声だがとある言葉を長門に向けて発してい
たのを聞き取った

『もう何回あなたに会うのかしら?』

と…俺は心の端で疑問を感じて家に帰った

長門の視線と梨花の言葉（後書き）

今回長門はエンドレスエイトのように寂しいそつに書きました

欠けた1日

翌日ー

俺は1日ぶりの学校へ行つた

だが…何かがおかしい

いつも見慣れてる学校の風景

生徒の連中

でも何かが欠けてる

そう何かが……

何かがというより誰かが

そんなこんなで朝のSHRが始まるとその欠けが何か分かった

そう、あのハルヒが学校を休んだのだ

それに長門も

珍しい…というより長門は有り得ない！

風邪も引かない宇宙人が何で学校休むんだよ！！

しかも昨日の夕方あった時は普通だったし

ハルヒの観察が目的なのに何故！！

俺はその日の放課後真つ直ぐ部室に向かった

すると部室にいたのは古泉だけだった

『朝比奈さんはどうした？』

『情緒不安定だったらしく早退されたそうですよ。』

『なあ古泉。俺が休んだ昨日何かあったのか？』

『ええ少し、朝比奈さんと涼宮さんが揉めましたね。長門さんは

いつも通りでした。』

『そうか』

『それから妙に気がかりな事があります。』

『なんだよ？』

『涼宮さんと朝比奈さんが首の辺りに包帯を巻いてました。』

『包帯？なんのために？』

『ケガをしたのかもしれませんね。』
『それはありえん!!』

朝比奈さんは有り得てもハルヒはありえん!!』

『少し涼宮さんの方は少し膿んでるように見えましたね。』

『膿んでた?』

『はい、血も混じってましたね。』

蕁麻疹でも発症して掻き毟ったのか?

『じゃ、俺帰るわ。』

『お気をつけて。』

俺は学校を後にして下校した

帰り道に梨花ちゃんと出会ったあの公園に立ち寄った

大きくも小さくもない池があるあの公園に

俺はその池をただ眺めていた

すると池には黄色いリボンが浮いていた

風で飛ばされて来たんだろう

そう言えば昨日梨花ちゃんもこの池覗いてたな…

この池に名前でもあるのか?

確か池の近くに小さな看板があった気がしたような

看板には

『鬼…後は消えてるな。』

さてそろそろ帰らないとな

妹と梨花ちゃんが待ってるしな

ハルヒの死

「ただいまー」

「キヨン君おかえりい〜」

「みー おかえりなのです にばー」

梨花ちゃん俺に笑顔をありがとうー！

1日の疲れが吹っ飛ばせ！！

「ニヤー」

「珍しいなしゃみせんも出迎えなんて。」

「しゃみせんは良い子なのですよ」

電話が鳴っている

「僕がでるのです」

「ああ、お願いな。」

「キヨン 学校の先生からお電話なのですー」

先生から？学力関係ならお手上げだ

それともSOS団のことか？

「はい変わりました。」

「あーキヨンか。お前のうち妹2人だっけか？」

「違います。親戚の子ですよww」

「そうなのか。じゃあ本題に入るぞ。」

学力じゃありませんように！！

「実はな。お前のクラスに涼宮ハルヒって奴いるだろ？」

「いますけどそれがどうかしましたか？」

「さっき近辺の公園で変死体で見つかったんだよ。」

ハルヒが…死んだ…

変死体…近辺の公園…

もしかしてあの池に浮いてたりボンはまさかハルヒの…!!
いやでも見間違いかもしれん!!

「先生、冗談よして下さいよ。」

「冗談じゃない。池では涼宮がいつも付けてるリボンが見つかったんだ。気分的悪くなるが連絡網で次に回してくれ。じゃな。」

プツン…ツーツー

「……………」

「キョン、どうしたのですか？また悲しい事なのですか？」

「ニヤー」

俺は梨花ちゃん問に答えず次の奴にその事を回した

てことはあの池の底にハルヒが沈んでたって事なのか!?

何でハルヒが…まさか自殺!?

何でこの前からこんなことばっかなんだよ!?

何で俺ばかり…!?

だが俺はまだ知らなかった

この後も悲劇が続き繰り返されること

広がる悲劇と最初の終焉

俺は腑に落ちた気分で

学校に登校した

ハルヒが…ハルヒが…死んだなんて…

すると古泉がニヒルな笑顔で校門前で手を振って俺を誘った

『なんだよ。』

『実は大変な事が起きまして。』

『ハルヒが死んだ事か？』

『それもそうですが、実は長門さんが行方不明になったんですよ。』

『え？』

長門が…行方不明…

『おいおい。冗談が下手だな古泉。』

『冗談じゃありませんよ。あのマンションから長門さんが居なくなつたんですよ。』

古泉の首もとを見ると少し赤くなっていた

『古泉、その首どうした？』

『何でもありませんよ！話を反らさないで下さい！…もういいです』

『ちよ…！…！…！』

どうしちまつたんだよ一体全体…

コッソソ…

『！？』

誰かの足音がし俺は振り向いたが誰もいなかった
空耳か……？

だが授業の時も俺はこの不吉な音に悩まされた

しかし授業以外でもその音はした

教室中から廊下中から図書室中からあらゆる場所から家でも自分の部屋でもリビングでもトイレでも寝に入ろうとしても

カタッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！コッソッ！

というあの音が俺の周りから聞こえるばかり！

ああもう止めてくれ

俺を…俺をこの音から解放してくれ！！

俺が何をした！

俺がハルヒを長門を救えなかったのが悪いのか！？

それなら十分反省してるよ！！

だから許してくれ！！

許してくれよおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおお

!!

『…ん!』

聞き覚えのある声!

『ヨン!』

こっちも聞き覚えのある声

俺は目を覚ますと家にいた

そこには妹と梨花ちゃんがいた

『梨花ちゃん? 此処は?』

『お家なのです。キヨンは学校で倒れて夕方になっても目を覚まさなかつたので谷口と国木田がお家運んで来てくれたのですよ には

ー

『谷口と国木田が?』

後でアイツらに礼言わないとな…

『キヨン君大丈夫?』

『ああ、もう平気だ。』

『みー なら良かったのです なら寝ぼけを飛ばすためにテレビでも見るのですよ 』

『アニメ見たーい 』

『ああ分かった分かった。今付けるからよ。 』

てかもう7時か…まだテレビ東〇がアニメやってるだろう

俺は梨花ちゃん達とテレビを見ながら夜を過ごした

2人を寝かせ風呂から出た俺はちよつと音量を小さめにテレビを付けた

すると…

北高の二年生女子

のどを掻き毟り死亡

と代々時に放送されていた

だが生徒の名前を見た途端更に絶望した

死んだ生徒の名前が朝比奈みくると書いてあったからだ

ウソだろ！！朝比奈さんが！！

一体なんで！！

クソ！！俺の親しい奴らがどんどん消えて行く…

こんな時に長門はどこにいるんだよ！！

するとテレビでニュース速報が入りまたウチの生徒が死んだと情報が出た

今度はくびつり自殺をし妙な事に首が何らかの原因で腐り首が千切れたと書かれている

そしてまたも死んだ奴は俺の知り合い古泉だった

もうSOS団のメンバーはいないに等しい

更に絶望的な悲劇は続く

次の日以降から北高生徒が自殺、変死体色んな殺され方をして死んでいった

そして数日後北高生徒は俺1人になった

俺の周りからはあの音は絶えず消えることもなく聞こえるはめだった
ただ希望が妹と梨花ちゃんだけだった
だが最近首もが少し…少しずつ痒くなってきた
痒みは次第に強くなり俺は掻き篋るようになった

ん？までよ…掻き篋る？

誰かと同じ死の方に似てるな…そうだ！朝比奈さんと同じ死に方じやねえか！！

俺は死ぬのか！！そんなのごめんだ！！

妹や家族…それに梨花ちゃんを置いて死ぬなんて全くごめんだ！！

誰か…助けてくれ！！

長門！！どこにいるんだよ！！

お前ならこの症状を…治せるだろ！！

助けてくれ！！助けてくれ！！

俺はまだ生きたい！！

死にたくない！！死にたくない！！

誰か…誰か…誰か…誰か…誰でも良いから医者呼んで助けてくれえ
ええええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええええええええええええええええええええええええええ
ええええええ！！

俺の意識はそこで途絶えた

居た場所はどこか歩道だったろうか

だか途絶える寸前梨花ちゃんが俺の前に立っていた

梨花ちゃんはどこか悲しそうな顔をしていた……

疑惑

暑い！6月の始めでこの暑さ！有り得ないだろ！

この暑さで親戚迎えに行つてこいなんてうちの両親はどうかしてるだろ！

てか親戚が来るなんて初耳だぞおい！

でも待てよ前にもこんなことが在つたような気が……またデジャヴか？

いやいやそれは無いだろ

第一今夏休みじゃねえし！

つか夏休み始まる少し手前くらいだろ！

さっさと迎えに行こう！

数分後ー公園に到着

『みー 初めましてなのです 僕古手梨花なのです よろしくなのですよ にゃ〜』

『俺はキヨんだ。よろしくな。』

可愛すぎる！

でも、前にもこんなこと在つたようななかつたような……まあ気のせいだろ

『じゃ、うちに行くか梨花ちゃん。』

『はいなのです』

俺は梨花ちゃんと仲良く手を繋ぎながら家に向かつた

すると確かこのあと梨花ちゃんがこの町で何か妙なことが起きてな

いかと言つはずだ

あれ？てか何で俺こんなに予知できったってか？
いや無いに決まってるんだろ！！

俺は至って凡人にすぎん！！

てか何考えてんだ俺！！しっかりしろ！！

『キヨン、1つ聞きたいことがあるのです。』

『ん？何だい？』

『この町で何か妙なことが起きてないのですか？』

想像した通りの台詞が俺に降りかかってきた！！
どう答える俺！！

梨花の正体と病原菌

梨花ちゃんへの質問の回答に迷ってた俺はとっさに
『うーん、特にそんないぜ。』

と言ってしまった

まあこれで良いだろ

『…本当なのですか？』

『へ？』

『本当にこの町には何も起きてないのですか？』

『あ、ああ。』

すると次の瞬間…梨花ちゃんの雰囲気が一変した

『キヨン…この町から去れ。後で公開をする。』

『え？後悔？』 『そう後で絶対後悔をする』

『その後悔って何なんだよ！！梨花ちゃん！！』

俺は思わず怒鳴ってしまった

だが梨花ちゃんは平然と話続ける

『もうすぐ…でも私が忠告しても貴方には伝わらない。』

『伝わらない？何がだよ！！』

『伝わらないのは伝わらないのです。キヨン、僕はもう暗い話は嫌

なのですよ。』

梨花ちゃんは普通の話し方に戻った

『あ…ああごめんな。』

『良いのです』

梨花ちゃんは微笑んでくれたがその目は笑ってはいなかった

その日の夜

俺は梨花ちゃんと妹を寝かしつけ風呂から上がったときケータイから着信が……

またか？こんな事あったような？

確か古泉からのような気がした

『もしもし』

「夜分遅くにすいません。」
「当たった！」

『手短に頼むな。妹と従姉妹が寝てるんだ。』

「では手短に言いますね。実はこの近辺で変死体が続出してると
すよ。」

と古泉の発言を聞いた途端

『がっ！！ああ…っ！！』

俺は激しい頭痛に見まわれた痛みと俺の中に何かが流れ込んできた
「どうしました！？大丈夫ですか！？」

何だこれ？記憶？未来か？

ハルヒが死ぬ！？

何だよコレ！！

ワケわかんねえよ！！

それに梨花ちゃん？何でそんなに悲しい顔してんだ？

それに死体？腹が切られて内臓が…喉元が血まみれ？

……そうだ！！思い出した！！

俺はこの後！！

「もしもし！大丈夫ですか！」

『ああ大丈夫だ。ちよっと頭痛がな。』

「そうですか。では切りますね。後のことはまた明日。」

『ああ明日な。』

そうか…またループしてんだな

参ったな。この事は古泉は気づいてるのか？

明日聞くとするか。

『ようやく気づいたみたいね。』

その声を聞いて振り向いたら後ろに寝ているはずの梨花ちゃんがいた

『なんだ梨花ちゃん。まだ寝てなかったのか？いつから其処にいた？』

『あなたが話してる間ずっとよ。』

『そうかい。それから思い出したよ、この町が悲劇を繰り返して続ける事を。梨花ちゃんが言ってる可笑しな事ってこの事だろ？』

『まあそうなるわね。あなたは気づいていないかもしれないけど私はこの世界を何回もループしてるわ。』

何回も？俺的には2回目ぐらいにしか感じないけどな

『信じるかはあなた次第よ。私はこの時代の…うっん、この世界の人間じゃないわ。』

『この世界の人間じゃない？てことはハルヒが言う異世界の人間って奴か？』

『ハルヒ？ああ明日会う傲慢そうな女ね。』

確かに奴は傲慢だ

『で、梨花ちゃんはどどういう世界から来たんだ？』まさかRPGの世界からとかじゃねえよな

『異世界と言ってもあなたが思う魔法みたいな世界からは来てないわ。簡単に言えば過去の世界から来たのよ。まあ異世界というより過去人かしら。フフ…。』

『か、過去？』

『今は何年かしら？』

『今は平成で西暦2000年は過ぎてるぜ。』

『私は此処に来る前は昭和58年の6月の世界にいたわ。』

『昭和！？じゃあ何で来たんだよ！』

『自分の意志で来たわけじゃないわ。あの女の声が聞こえた瞬間私はこの世界に誘われた。』

『女の声？それってハルヒの事か！』

『まあそういう事になるかしら。』

『じゃあ…あの変死体や自殺はハルヒのせいで起きたのか！？ハルヒが死ぬことを望んだのか！？』

『それは違つわ。この悲劇は何か別の事で起きてると思う。』
『別の事?』

『たぶん私のいた世界の病原菌のせいだと思う。』

『病原菌?じゃあ梨花ちゃん!お前のせいなのか!』

『今の所はそんな感じね。』

『その病原菌の症状って喉元を掻き毟って死んだり腹を引き裂かれて内臓がグシャグシャに飛び出たり変な音が聞こえたりする症状ってあるか?』

『ええそうよ。腹を引き裂かれて内臓が飛び出てるのは多分症状で幻覚を見てを殺したのかもしいわね。』

『幻覚症状もあるのか...』

『そうよ。この病原菌は本来の私のいた時代の村にしか発症しない風土病って所かしら。』

『村?梨花ちゃんが住んでる雛見沢って所のことか?』

『そう。その病原菌は雛見沢症候群と言つわ。』

『雛見沢症候群...治すことは出来ないのか?』

『治すことは先ず無理ね。症状を抑える事はある程度の症状の人間なら出来る。それだけよ。雛見沢症候群の病原菌は体内から消滅させることは今雛見沢の医学ではムリね。』

『そうかよ...。』

『症状を抑えるのには特殊な呼吸法で一週間以上睡眠する事と薬で抑えるしか方法はないの。でもその薬はこの世界には無いから無理ね。』

『何でだよ!?!』

『私はその薬の調合法を知っているけど扱える人間が居ないからそれだけよ。それにその薬や睡眠法は一定の症状しか効かないの。末期症状に使っても意味はない。』

『末期症状って具体的にはどういうもんなんだ?』

『一番分かりやすいのは喉元を掻き毟るやつかしら。その傷口からウジが湧く。』

『……………!!』

古泉が言つてた

ハルヒと朝比奈さんが首に包帯してたのはそういう事かよ

俺は吐き気がした

最悪じゃねえか!!

何とかしねえと大変なことに……………!!……………この事を誰に教えても大丈夫か?』

『構わないわよ。でも彼らはこの悲劇を覚えてるのかしら?』

『俺らSOS団は前にハルヒのせいでそういうループは体験してるんだ。たぶんハルヒを除けば覚えてるのが大半だ。』

『そう。でもそう上手くいくかしら?』

『え?』

『この後起きる出来事を考えてご覧なさい。』

起きる出来事: 確か部活でロシアンシユークリーム早食い大会になつて……………

『ハルヒが人間不信に陥る!』

『そうよ。その事を考えて計画は立てる事ね。…ではキョン おやすみなさいなのですーにば』

『ああお休み。』

すれ違う思考と記憶

その日の昼休み

俺はハルヒを除いたSOS団全員を図書室に集めた

図書室は長門のお気に入りの場所でもあるし

色んな点で効率がいい俺はみんなこの一連の出来事を一通り話した
『と言うワケなんだが古泉と長門は兎も角、朝比奈さんご理解いただけました？』

『あ、はい。』

『……………』

長門この時ぐらいだんまりはやめてくれ

『では詳しい事は放課後に部活の終了後にあなたの家に向かいその古手さんにお話を聞くということはどうでしょう？』

『その必要は多分ないぜ古泉。多分そろそろ……………』

『みー キヨン お弁当持ってきたのですよーにぱー』 『おー

梨花ちゃんありがとな。』

『みー キヨン お弁当忘れちゃダメなのですよ。』

『ああ悪いな。』

『キヨン君。その子は？』

『朝比奈さん。この子が古手梨花ちゃんですよ。』

『はじめましてなのです。古手梨花なのですよ にぱー』

『貴女が古手梨花ですか……………』

『みー お兄さんは誰なのですか？』

『おや？貴女は何回も我々に出会っているのではないのですか？それとも初めて会ったように演じているのですか？』

『……………ふふふ。どこの世界でも貴方はキヨンより感が鋭いわね。古

泉一樹。それに……………長門有希。』

なっ！さっそく黒い梨花ちゃん登場かよ……………

『そっ……………』

長門。ハルヒ居ないんだから普通に俺に対してみたいに梨花ちゃんにも接してくれ

『さっそくですが古手さん。貴女幾つかお聞きしたい事があります。よろしいでしょうか？』

『どうせこのループを止める方法でしょ？私にはそんな力ないわ。あるとすれば私を元いた時間軸の世界に戻るか涼宮ハルヒが雛見沢症候群以外で死ぬか殺されるかしないと終わらないと思うわ。』

『そうですか。意外に残酷な発言をしますね。』

『何度モループをし続けているとただこうなるだけよ。』

古泉と梨花ちゃんが話してる間に俺は朝比奈さんに1つ質問をしよ
うとした

『朝比奈さん。前の世界でシュークリームの早食いの時に中身に何を入れたか覚えてます？』

『えーつと…それが…覚えてないんです。』

なんてこった！

『そのシュークリームの早食いを部室でキョン君はしたって言いま
したよね。それも私…その前も全部覚えてないんです。』

あの夏みたいにハルヒ除いて団員全員が覚えてるわけじゃないのか
！？

『だから…ごめんなさい。』

解答を求めるとしたら誰に聞けばいいんだ？

長門か？梨花ちゃんか？

『朝比奈さん。本当に覚えてないんですか？』

『本当なんです！信じて下さい！』

『そんな怒らなくても…』

『怒ってません！』

『……………』

長門！今は本読む場合じゃないだろ！

ああもうどうすりゃいいんだ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6747s/>

エンドレストラジティ ~ 終わり無き悲劇のカケラ ~

2011年5月29日04時46分発行